DOI: https://doi.org/10.11433/janpora.NPR-B-25-00006

新川達郎（監修）・川中大輔・山口洋典・弘本由香里（編）『コミュニティ・デザイン新論』

さいはて社，2024 年，365p

評者：西出　優子（東北大学）

本書の概要と意義

第 23 回日本 NPO 学会賞優秀賞を受賞した本書は，「現代の難問に対してコミュニティと共生という観点から専門性の異なる研究者と実務家が多様な視点で取り組んだ作品」として高く評価された．本書は 15 名の著者による学際的研究書かつ実践書であり，様々な課題が山積する現代日本社会において，何を目的とし，誰がどのようにコミュニティを構築し持続させていくかという根本的な問いに挑んでいる．統一的な定義や位置づけを明確にするのは困難であると認識したうえで，各執筆者の視点・問題意識から問いを立て，コミュニティを共生と公共性の観点から接近し答えていく形で，既存の理論を捉えなおし，新たな知見・実践知を導出している．

本書は三部構成で，それぞれ根源的な問いを立てている．第 1 部「共生社会に向けての包摂／平等化はいかにして可能か？」では，多文化化，貧困・格差，ポスト標準家族時代における社会的包摂の課題を扱っており．第 2 部「むら・まちの持続／縮退はいかにして可能か？」では，人口減少を前提とした地域の持続可能性を問うている．第 3 部「現代的な共同性／公共性の創造はいかにして可能か？」では，多様化する社会における新しい公共性の創出を探求している．

これらの問いは，いずれも現代日本が直面する「困難＝希望をめぐる難問」である．人口減少，超高齢化，災害の頻発，コミュニティの衰退という厳しい現実を「困難」として直視しつつ，そこに新しい社会のあり方への「希望」を見出そうとする姿勢が貫かれている．共生社会の基盤をなすコミュニティ政策とは何か，集落のレジリエンスを高めるにはどうすべきか，共同性と公共性を架橋するにはどうすればよいか，などの深い問いを立てて，長年にわたる地道なフィールドワークや実践報告も豊富に織り交ぜながら丁寧に論考を進めている．

本書の特徴と強み

学際性と多様性

本書の特徴は，政策科学や社会学，減災・人間科学，建築・都市計画学，事業構想学など，異なる専門分野の研究者と，医療，教育，NPO，アートなど多様な現場で活動する実践者が協働している点にある．各分野の第一人者から中堅・若手の実践的研究者，現場の実践者まで 15 名の執筆陣が集結している．この多様性は統一性に懸念が生じるリスクもあるが，各部に明確な問いが設定され，序章の対談と終章の座談が全体を統合することで，多様性と統一性のバランスが保たれている．むしろ，複雑化する現代の地域課題には単一の専門領域では対処困難であり，学際性が強みである．

理論と実践の往還

理論と実践の往還も本書の強みである．理論的考察を行う章と，具体的実践を報告するコラムで構成されている．新川による共生社会論，川中による市民性論，筒井によるケア論などの理論的章につづき，多文化共生や少女支援，世界農業遺産，地域医療など，様々な社会課題に向き合う現場の実践報告が織り交ぜられている．また，特に，研究者自身が長期的なフィールドワークに基づき執筆している点も特徴的である．渥美の「尊厳ある縮退」論は被災地での継続的関与から生まれ，山口の「適疎受容」概念は農山村での実践から導かれ，髙田の京都まちづくり論は長年の研究蓄積に基づくなど，実践に根ざした「アクティブな知」を提示している．

独自の概念提示と方法論

本書は既存のコミュニティ・デザイン論を踏まえつつ，それを批判的に検討し，新たな概念と方法論を提示している．「尊厳ある縮退」「適疎受容」「湧活」「タイトでオープンなコモンズ」「ルーズプレイス」「ポスト・ヒューマンな公共性」などの独自の概念は，従来の成長志向・拡大志向のまちづくり論とは異なる，縮退・縮小を前提とした新しいパラダイムを示している．特に「尊厳ある縮退」は，人口減少を否定的に捉えるのではなく，縮小の中でいかに人間の尊厳を保つかという問いを提起し，集落ソーシャルワーカーという具体的提案に結びつけている．この概念は，人口減少という避けられない現実に対して，単なる撤退や放棄ではなく，尊厳をもって対応する道筋を示している点で画期的である．

本書の貢献・課題と展望

本書の理論的貢献は，「縮退」を前提とした新しいコミュニティ論であること，包摂と共生の具体的方法論を提示したこと，共同性と公共性の関係性を再定義したこと，学際的統合による新たな概念枠組みを提示したことにある．実践的にも，現場で使える概念とツールを提供し，多様な実践事例からの学び，研究者と実践者の協働モデル，具体的な制度・政策提言を行っている．

課題としては，多様な視点が取り入れられている反面，統一性に欠ける印象がある点である．対談・座談での議論があるものの、各章の議論をより有機的に結びつける工夫や，全体を貫く理論的枠組みのさらなる明確化が望まれる．また，提示された概念や方法論の実効性や一般化可能性については，今後のさらなる実践や検証も望まれる．

しかし，これらは本書が開いた可能性の大きさゆえの課題でもある．本書は，コミュニティ・デザイン研究の新たな地平を切り開き，「今後の理論と実践の展望の可能性を開く」ものである．現代日本が直面する困難な課題に真摯に向き合い，学際的協働と理論・実践の往還を通じて，新しいコミュニティのあり方やその方策を探求した意欲的な「実践的学術書」かつ「学術的実践書」として，研究者・実践者・政策立案者にとって必読書である．